TEN ROOMS OF THE MIND

MADNESS

Excess



Gilletteの狂気

過剰

心の十の部屋

誰もが、自分で選んだわけでもないのに住んでいる家がある。

住所はない。どの地図にも載っていない。それでも、実際に暮らしたどんな場所よりもよく知っている。なかには十の扉がある。

気づかないまま、毎日開けている扉もある。

自分には関係ないというふりをして、鍵をかけたままの扉もある。

そして、自分で建てたわけではないのに、なぜか内に抱えている部屋もある。これは理論ではない。

棚でほこりをかぶっている心理学の手引書でもない。

この十の部屋をひとつずつ、たいていは自分がどこにいるのかも知らずに通り抜け、いま、肩にいくらか歳月を重ねて、体験したとおりに描こうとしている一人の男の記録だ。

十の扉。

私はすべて開けた。

あるものは好奇心から。

あるものは渋々。

もう引き返せなくなってから、ようやく開けたものもある。

これらの部屋に見覚えがあるとしたら、それが私の物語を語っているからではない。

どこか深いところで、あなたの物語をも語っているからだ。

フェルディナンド

狂気 — 過剰

狂っていると言われた。

一度ならず。

考えすぎるから、というときもあった。

感じすぎるから、というときもあった。

そしてときには、ただ物事を別の角度から見ていたというだけで。

やがて分かった。狂気とは多くの場合、分類できないものに私たちが貼るラベルなのだと。

だが、過剰な感受性から生まれる狂気というものがある。

過剰な問いから。

奥行きのない表面を受け入れられないことから。

狂気とは、思考が言葉より速く走る部屋だ。

感情が一度に押し寄せる部屋。

心が扉を閉ざせない部屋。

そこを通り抜けた者は、決して元のままでは出てこない。

何かを見てしまったからだ。

そして、見てしまったものを、見なかったことにはできない。

狂気は知性の反対だと、多くの人が信じている。

私は納得していない。

ときに両者は近い親戚だ。

ときに狂気とは、最後の限界に達した知性である。

もはや収まりきらなくなる地点。

あまりに多くのつながりが見えてしまう地点。

あまりに多くの意味。

あまりに多くの現実が、同時に。

そうなると、言葉ではもう足りない。

残るのは身ぶり—あるいは沈黙—という不完全な通訳だけだ。

フェルディナンド